

大阪愛珠幼稚園・北野中学校を参観した清国人

菅野正

はじめに

清国、当時清朝治下にあった中国は、十九世紀半ばより、先進諸国との相つぐ戦いに敗れ、国家は衰退の一途をたどり、分割の危機にあった。二十世紀に入って、義和団事変のあと、それは決定的となった。それに対応すべく、いわゆる「光緒新政」が始められ、各分野で改革への道が模索された。各国の実情視察のため、海外へ視察団が派遣された。とりわけ、日本へは、政界、商工業界、教育界、軍界等の調査、視察団が多く出され、日本への留学生が一九〇五年（明治三十八年）には八千名にも達するに伴って、その引率者、監督官として来日する人もいた。さらに、一九〇三年には、大阪で第五回内国勸業博覧会（大阪博覧会）

が開かれ、来日者・来阪者の増加に連なつた。名目は内国勸業博覧会であつたが、実質は万国博覧会であつた。日本は、各国とりわけ清国・韓国に対し、博覧会に多く出品を要請し、清賓館、韓賓館の専用旅舎を作り、来日の運賃割引等、さまざまの便宜を見学者に計つた。

こうして、明治末年、来日者、来阪者が増えるなか、大阪市立愛珠幼稚園、府立北野中学校を参観する清国人が多くなつた。その中に、中国近現史上、各方面で重要な役割を果した知名の人が何人かいた。その参観者たちの記録、その人達に関連することを紹介するのが本稿の目的である。

一、大阪市立愛珠幼稚園

— 参観記を書きのこした人々を中心に —

大阪・淀屋橋の近く東区（現在表示…中央区）今橋三丁目にある大阪市立愛珠幼稚園は、一八八〇年（明治十三年）に船場の商人の寄付で、瀧山瑄議員らの発議により創設された。現存する幼稚園としては、東京お茶の水大学付属幼稚園につぐ二番目に古い。

一九六九年には、長きにわたって収集・保存されてきた資料の「所蔵図書目録」「所蔵文書史料目録」「所蔵教材・教具・器物類目録」（いずれも明治・大正編）の三部作の刊行がなり、日本の幼稚園教育研究上に貴重なものを提供している。

また、現在地に現存する園舎は一九〇一年（明治三十四年）に竣工したものであるが、木造和風の堂々たる「御殿」風園舎（図版①）は、今次の戦争の大阪空襲の際にも被災を免れ、終戦直前の解体・疎開の処置も受けず、百有余年の風雪に耐えてきたその建物も貴重なものである。その園舎は、今年二〇〇七年四月の文化審議会の答申をうけ、文部科学大臣から、現存する最古の幼稚園建築として、幼稚



全景



正門

① 現存する大阪市立愛珠幼稚園

園舎としては初めて、国の重要文化財に指定され、六月十八日『官報』に告示された。福沢諭吉、大村益次郎、橋本左内らが学んだ緒方洪庵の「適塾」とは背中合わせにあり、今日では全くビルの谷間に埋もれてしまっているが、二座の重要文化財は、北船場の一角に端座し、いわば小さな文教地区を形成している。町人の学問所であった「懷徳堂」も近くにあった。

園名の命名の由来については『愛珠幼稚園史』（明治三十四年四月、瀧山瑄編）には

「明治十三年四月：諸般ノ準備成ルヲ告ゲ、愛珠幼稚園ト名ツケ、設立願書ヲ大阪府知事ニ提出ス、園名ハ袁士元ガ海棠ノ詩ノ「主人愛花如愛珠、春風庭院如園畫」ニ取ル

とある。元朝の袁士元の詩語は袁の詩文集『書林外集』所収の「和劉德彝海棠詩」の最初の十四文字である。一方『沿革誌』（明治三十五年十一月纂輯、大阪市愛珠幼稚園）には、

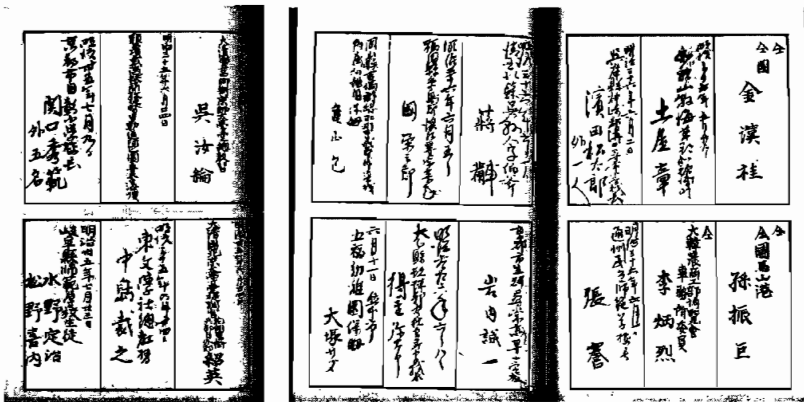
「明治十三年四月、…準備略整ヘルヲ以テ、園名ヲ愛珠ト命シ、規則、保育科目等ヲ具シ設立ヲ稟請ス、名

ハ藤澤南岳翁ノ撰フ所、白居易ノ詩 掌珠一顆兒三歳 又方看掌弄珠、二因リ 愛兒猶愛掌中珠ニ取レルナリ」

とある。白氏の最初の七言は、「全唐詩」白居易二十八所収の「哭崔兒」の冒頭の七言である。

しかし、最近の『愛珠・九十年小史』『愛珠幼稚園百年史』『愛珠・一二〇年小史』等には、いずれも表紙のすぐ後に「園名の由来」として、主人花を愛すること、珠を愛するが如しとて幼な子もまた掌中の珠として愛するとの意である 漢学者 藤澤南岳（翁）選」と記し、併せて袁士元の七言律詩「海棠の詩」の全句をのせている。藤澤南岳は父東嶽創設の泊園書院をついだ。（一八四二—一九二〇）

ところで、同園百年史の沿革の項に「明治三十六年 知名の来観者煩繁となる」とある。その中に多くの清国人がいた。『来観人名簿』（図版②③）に署名している清国人の数は、明治三十五年（一九〇二）—十二名、三十六年—五十二名、三十七年—六名、三十八年—十三名と数えられる。以下来園の年月別に紹介する。



②吳汝綸らの署名がみえる

「来観人姓名録」

③張審らの署名がみえる

一九〇二年
 (明治三十五年) 三月二十七日来園
 ○田吳焯―湖
 北自彊学堂教習
 愛珠幼稚園の「来観人名簿」に署名する最初の清国人で、名簿には署名と肩書と別に「外五名」と記している。彼らは、当時積極的に改革事業を推進していた湖

により派遣されたものである。なお田吳焯は一九〇五年十二月にも、考察政治大臣である戴鴻慈、端方らとともに来日している。(署名の姓名―肩書、あるいは住所を示す。この際、清国あるいは大清国は略す。以下同様)

一九〇二年六月二十四日

吳汝綸らの視察団は、管学大臣張百熙により学事視察のため派遣されたもので、清国要人の来日に、日本各界はあけて歓待した。「大阪朝日新聞」も一行の来日に先んじて「本邦文明と支那教育」と題する社説を三日間に涉つて掲載し、日本が「隣邦の教化に資せんこと亦当然ならずや」と歓迎の意を示していた。(同紙六月二十一―二十三)

前日の大阪俱樂部ホテルでの歓迎会には、大阪朝日新聞上野理一社長、大阪毎日新聞小松原英太郎社長、大阪新報社山田敬徳社長、大阪商船中橋徳五郎社長、三井物産支店長、日本郵船支店長、紡績連合会山辺文夫会長、孫実甫(代表的華僑)、梁直臣(後述)、藤沢南岳(泊園書院)ら各界から出席した。(大阪毎日新聞)六月二十五日)

同日、大阪市東区学務課より、愛珠幼稚園に対し「清官吳汝綸明日午前中貴校参観ノ筈ト御了知被成度此段及通知

候也」と通告した。また「在大阪両日、所乘馬車、均大阪府豫備」(『吳汝綸日記』)とある。

来園当日は、小野視学官が案内し、塩野園長、菅沼助役、中島府属、伴市書記、藤沢南岳らが同園で出迎えた。

○吳汝綸—京師大学堂総教習

安徽省桐城県出身の碩学。進士の資格を得て、各地の知府等を歴任し、保定の蓮池書院院長となり、人材育成にととめ、曾国藩・李鴻章の幕僚もつとめた。管学大臣張百熙の強い要請で京師大学堂(北京大学の前身)総教習についた。同時に日本の学校教育制度視察を申出て、張の賛同を得て、官命によって来日となった。当時、吳は六十二才。(二八四〇—一九〇三)

当日の「吳汝綸氏一行」を報ずる「大阪朝日新聞」(六月二十五日)には次のようにある。

「…、標本室備品を精細に視察し、運動場にては種々の遊戯を見て、吳氏は、如何にも面白しく、面白きのみならず、其利益は非常に多かるべしと感賞し、児童の頭を撫して、佳き兒なり可愛らしくと連呼し、便所の清潔なるに驚き、保育室に入りては、児童の組

立遊戯、造花の有様を見て、自分の孫にも此位の小供多しとて、教師に向ひ此小供等の為に其勞を感謝すと語りぬ、児童等は為に種々の造花を造りたれば、帰国の時自分の孫等の土産として分与せん、当園參觀の実況を物語らば、児孫のみならず家庭の喜び今より想像するも愉快に堪へずと談じ、又菅沼助役と問答し、園則並に一ヶ年の経費(三千元)を質し、紹英氏を顧みつ、

当園の組織、示導方豪も問然する所なし。放任の裡に秩序と規律あり、児童啓発の趣旨に叶へり、帰国の上は是非当園の如きものを設置すべしと語らひ、又需めに応じ吳氏は「蒙以養正」と大書せりと。

その「蒙以養正」は、図版④の如く表装され保存されて



④「蒙以養正」
吳汝綸の書

いるが、語句自体は、「易経」の中にある語句である。（全
釈漢文大系版）「易経上」によると、

蒙……蒙以養正、聖功也。

（通釈）…童蒙のときからその本有の正しい人を養い育て
るのは、童蒙をして将来聖人に達せしむべき仕方であると
いうことである。

（語釈）「養正」童蒙本有の正しい心を養い育てる。「聖功」
聖人にする方法。「功」は工夫、仕方。

なお、この語句は、「聖論廣訓」の中にも引用されてい
る。魚返善雄編「漢文・華語」康熙皇帝遺訓（昭和十八
年刊）

第七条 黜異端以崇正學「朕惟、欲厚風俗、先正人心、
欲正人心、先端學術、夫人受天地之中以生、惟此倫常
日用之道、為智愚之所共由、素穩行怪、聖賢不取、易
言、蒙以養正、聖功以之、…」

とあり、その最後の「易言…」の部分の華語解として次の
ように記している。

古来的書上説、人從小兒、就要望端正處引誘他、這便
是做聖人的根基了。

吳汝綸自身、愛珠幼稚園については、「東遊叢録」（明治

三十五年、東京三省堂、東京都立日比谷図書館実藤文庫所
藏）の中の「摘鈔日記」で、

「十九日戊寅…出赴幼稚園、觀小兒戲舞、保姆教習相

與領導、皆有行列、群兒歡甚、又至室中 觀小兒戲作
河橋、海閑、輪車等、又有假馬、假船、木洋鎗等、使
之游戲、其教習多取之高等卒業生、故頗通教育」

と記している。これは、のち「桐城吳先生（汝綸）日記・
教育第十」に収められている。

なお、「東游日報訳編」（光緒二十九刊、実藤文庫所蔵）
には、「二十五日、東京朝日新聞云 二十四日大坂特発電
報、吳先生一行、今早出旅館、巡覽集英小学校、愛珠幼稚
園、清水谷高等女学校、師範学校、農学校等、次訪大坂朝
日新聞社、觀印刷場、出梅田停車場、夕刻入西京、投木屋
町松葉樓。」
とある。

○紹英—北京大学堂提調官

滿州馬佳氏の人、肅親王の一族、兵部員外郎を授けられ、
京師大学堂提調となる。辛亥革命前に内務府大臣、来日時
は四十三才（一八五九—一九二五）。「紹英赴日考察日記」
〔紫禁城〕總第六十期、一九九〇年五期）に以下のように

記す。

「十九日早：出往幼稚園、親小兒戲舞歌唱、教習保姆相與領導皆有行列、一教習作樂、侑歌羣兒、歛甚。又至標本室、一切車馬刀槍船礮及飛潛動植物、皆作成式樣、無不備具。教育室六區、分類用功、中有習字、習畫、唱歌、擺益智圖、穿紙花串、摺紙玩藝等事。大者五歲、小者三歲、教習多女子、教法重在養其天趣、因勢利導之也。其院中皆用小石如豆鋪地六七寸厚、據云防小兒傾跌也。又有攝生室、為小兒養病之所、一切牀褥藥物皆自備、自明治十二年開辦已二十三年。凡小兒一百八十、每年經費三千元。」

○李添順—頭品頂戴遇缺簡放提督吉勒通阿巴圖魯

○栄勲

軍機大臣、文華殿大學士であつた清朝の重鎮の栄祿の姪婿。しかし、幼稚園には来園せず、前日の夕刻、直行列車で東上した。

○中島裁之—東文学社總教習

もとより日本人。来日使節団の通訊係。熊本の人、清国にわたり呉汝綸の門弟となる。一九〇一年春、北京において日本人の経営する最初の学校として北京東文学社を設立

した。清国青年に東文即ち日本語を伝習し、中等学校程度
の教育を施するのが設立の目的で、呉汝綸がその顧問格で、
李鴻章、袁世凱よりの補助も受けたという（一八六九—
一九三九）。後にカルピス会長になる三島海雲もその教習の
一人であつた。

一九〇二年九月二日

○巖修—翰林院編修

天津の人。二十四才で進士になり、のち翰林院編修を授
けられ、貴州学政となる。一八九八年戊戌改革の時、「経
濟特科」を設けること上奏するが、奏功せず、天津にもど
り教育救国の道を歩む決心をし、一九〇二年長男、二男を
つれ自費で来日した。当時四十二才（一八六〇—一九二九）。
幼稚園訪問については、一九九五年十二月に復刻された巖
修『東游日記』（武安隆点注、天津市人民出版社）に以下
のように記している。（なお、東游日記とは、日本滞在日
記のことであり、日本旅行記、日本紀行の意である。）

「八月初一日（九月二日）

大野鈴子同赴愛珠幼稚園

…遇大野鈴子、約至愛珠幼稚園一看（東区今橋三丁目）、

乃辞山口而出。愛珠幼稚園始設于明治十三年六月一日。額設百八十人、建築等費八万六千余元、歲需經費三千五百六十元。学生分六班、其課程列于表有唱歌、游嬉、内游、外游、積木、画方、縫取、著排、環排、板排、摺紙、貼紙、繫方、豆細工、粘土、説話等目。余所見者板排、繫方、摺紙、画方、著排、積木、環排、課之難易各視其年之長幼、每班一人授之、每頭二班有一人襄教。」(人民出版社版は簡体字を使用、常用漢字にもとす)

なお、嚴修は、一九〇四年にも再度来日している。(前掲・嚴修『第二次東游日記』)

○嚴智崇

嚴修の長男。のち民政部主事、駐日公使館秘書となる。

当時二十四才(一八七九～一九一八)

○嚴怡

嚴修の次男。東京高等工業学校応用化学科卒業。のち農

商部司長、河北省教育庁庁長を歴任。当時二十一才。(一

八八二～一九一八)

○清水芳吉―大阪市西区幸町二丁目

大阪清語学校校長。嚴修と親しい友人であった。視察団

の通訳係。大阪清語学校は、上海日清貿易研究所を卒業し、日清戦争に陸軍通訳として従軍、明治三十二年に大阪控訴院及び大阪地方裁判所の支那語通訳官となった西島良爾が在任中自宅に設立した学校である(『東亜先覚志士記伝』下巻・列伝)

一九〇三年四月九日

○王鴻年―中書科中書官、法科大学生

彼は一九〇五年八月にも、四川総督錫良の命で政治・法律・学務調査のため来日している。

一九〇三年四月二十七日

○喜源―遊歴官湖北即補道

○陶繼貞―遊歴官湖北即補知県

署理兩湖制台端方の命による。

一九〇三年五月二十三日

○華学涑―北京工芸局

天津の人。当時三十才、天津で自立小学堂、初等工芸学堂を建て、天津で活動した。(一八七二～一九二七)

○張壽春—天津

張伯苓のこと。二、大阪府立北野中学校で詳述する。

○王春瀛—直隸学校司

天津人、新式学堂の創設に尽力する。

○李綸—直隸学校司

○喬保謙—天津

○林澗—天津

○江藤豊—三井中国留学生

後述する清水安三氏を支援するよう満鉄の松岡洋右氏に紹介する。

○清水芳吉

前掲、今回視察団の通訳係。六人の清国人は天津関係者、来日は官命によるものでなく、自費のよう。

一九〇三年六月一日

○張審—通州民立師範学校長

江蘇南通の人、科挙試に一番の状元で合格。通州紡績工場、通海墾牧会社をつくり、通州師範、女子師範、南通大学等を創設した。先に記した呉汝綸の「東游叢録」を読んで、日本へ視察にいく決心をしたという。大阪博覧会見学

も目的の一つであった。この年、四十九才、自費での来日である。帰国後、数々の「教育立国」、「興業立国」の事業を行い、革命後、民国臨時政府実業総長、中央教育会会長をつとめた。(一八五三—一九二六)

来日は、七十日間及び、その間九州から神戸、大阪、名古屋、静岡、東京、函館、小樽、札幌、姫路、倉敷の各地を訪ね、当地の教育、農工商、その各種の施設を見学した。とりわけ、この年、大阪で開かれていた第五回内国勸業博覧会には、来日直後、帰国直前、何日もかけて、見学、視察し、器具の買付を行っている。全国の教育施設の視察は、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、大学から各種実業学校、師範学校、数十校に及んだ。

「大阪朝日新聞」は「翰林修撰張審氏」の絵入り肖像をのせて紹介し、その施設訪問・視察の動向を詳しく伝えていた。

張審は帰国した翌年の一九〇四年、視察日記を「発卯東游日記」と題し公刊した。実藤文庫所蔵のこの本のはのち「張季子九録・專録」に収録されている。その中での幼稚園の記述は以下の通りである。

「五月初六日(六月一日)

：次觀愛珠幼稚園、園長塩野吉兵衛、園之教室無多、一室僅容三四十人、四周植紫藤為棚、庭鋪細石數寸為外運動、内運動場與講堂合、頗寬廣、課程則唱歌游戲積本摺紙而已、是日為幼稚園開設二十三年記念會、塩野高橋導諸兒童、先於日皇御影前、行鞠躬禮、既而說發達保育之義、既肅客置宴、既導觀其游戲運動、一人奏風琴、二保姆導諸童為種種游戲、有演方陣式者、有演晨起着衣、盥漱早膳、結伴赴園式者、既復入宴、人各木合二、肴飯蔬果十品、魚二品、所謂辨當也、魚冷而腥、色則甚潔、食畢行點茶禮、臨行保姆同送之門、一保姆年十八、而教法最敏捷、詢其人為間中夕日音「藤沢南岳の案内で來園した日は創立記念日。その日の幼稚園の見聞を記している。」

なお張翥のその日に書きのこした「成人在始」(図版⑤)の扁額について。扁額の最後に

節晋張華詩語為愛珠幼稚園題 張翥

とあるように、晋の張華(張茂先)の詩語を節録したものである。張華は三世紀の晋朝の文人政治家。この詩語は「勵志一首」の中の詩語である。一首は「文選」卷十九に収められている。今(全釈漢文大系版)「文選」によって

みれば、

「：高以下基

洪由緘起 川

廣自源 成人

在始 累微以

著 乃物之理

：」

すべて高いもの

は低いものを土台

にし、大きなもの

は細いものから始

まる。川の広いの

は源があるため、

それと同じくりつ

ばな人になるのも

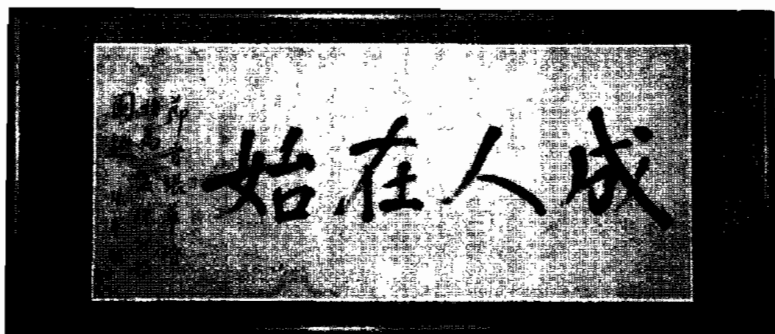
始めが大切。小を

積み重ねていけば

自然に目立ってく

るもの、これこそ

よろずに通ずるこ



⑤「成人在始」張翥の書

とわり。」とある。

(新釈漢文大系版)『文選』によると「成人在始」の語釈として「国語」には韓献子の「人を成すは、始めに善に与するに在り」の語がみえる」とある。

○蔣黼—江蘇吳縣人字伯斧

京師大学堂の音韵教習。(武安隆氏)農学報主筆で、実学を鼓吹し、農学堂をつくった。(大阪朝日新聞)五月三十一日「蔣伯斧氏」)

一九〇三年六月二十二日

○胡景桂—前湖南按察使 現直隸大学総長

その東游日記である。「東瀛紀行」(光緒二九序刊、実藤文庫所蔵)での幼稚園に関する部分の後半は

「…每人腰繫革褰、父母籍以考查、褰不能自開、内書月日、教習蓋戳、無印即為逃、学園係官立、学生每人歳費十元余、由官出」

とある。通園簿に関心を示している。

○丁稚魯—直隸大学司弁

○晏宗慈—鐵路総弁文案長

その東游日記である「隨槎日記」(清光緒刊、実藤文庫

所蔵)に

「五月二十七日…大阪官立愛珠幼稚園、主人導入応接室、贈沿革志、学制嚴明、有蒙以養正遺意、禮失求野、其或然歟、循覽一周、…」

「蒙以養正」の額があつた。孔子の言う「禮失而求諸野」(漢書芸文志卷三十)「都邑で礼が失われれば、これを外野に求める、とはこのことではないか」と記している。以上の人は、直隸総督袁世凱の命によって、来日したのである。

一九〇三年六月二十四日

○徐田—北洋工芸学堂教習

○孫鳳藻—北洋工芸学堂教習

天津人、のち北洋大学卒業。直隸水産学校校長。当時十九才(一八八四—一九三二)

一九〇三年十月十七日

○王景禧—直隸学校司

北洋巡起日本觀察学務官兼帯学生学校司總辦翰林院編修と肩書を付す。(保育日誌)王氏は在日清国留学生二十

余名を引導して来観した。その東游日記『日游筆記』（光緒三〇刊、実藤文庫所蔵）は、標本室參觀から教育器具、教育図書のこと及び、体育、徳育が知育と並び重視されていること、音楽、体操、二組に分かれての競争を見学したこと、教科課程にふれ、最後に幼稚園の経営に言及し、経費は大半公費による、保育料は要るが、安くて負担しやすい、市内富家が捐助金を出し、教育を重視している等々、この種幼稚園參觀記に比べ、やや詳しく、記録している。

一九〇四年五月二十日

○孟繁英—現大阪高等商業学校教員

清国奉天府海城県人と記す。「大阪商科大学六十年史」（一九四四年刊）の「旧職員一覧表」に「教授囑託 孟繁英 明三七—明四〇」とある。

一九〇四年十月八日

○孫淦—前浙江留学監督

孫は妻と、張東猷（支那遊歴生）を伴って来園しているが、彼は、前年六月張耆らが来阪の時は通訳をつとめた。さらに一九〇九年六月二十一日にも再び幼稚園に来園し

た。その時の肩書は単に、「清国商人」と記し、清国神阪領事館員である張詢と一緒の来園である。大阪川口居留地に居住していた模様である。

一九〇五年十月二十三日

○陳惟壬—北洋銀元局

父の蔭で官僚となり、華北で、多くの会社、企業、学堂を創設し、経営した。

○趙元禮—直隸工芸局

天津人、天津工芸学堂理事。一九一八年参議院議員。晩年、嚴修・林兆翰（後述）と城南詩社を組織する。文人政治家で著作集もある。来園時、三十七才（一八六八—一九三九）

幼稚園に書きのこした「澤周粵楸」（図版⑥）について。



⑥「澤周粵楸」
趙元礼の書

その出典は分からない。諸橋轍次「大漢和辞典」では粵も楸もともに、「ひこばえ」の意で、「澤及枯骨」「澤及三族」「澤及萬世」の成語がみえる。

「澤被新枝」、「澤及幼苗(樹)」の意で(武安隆氏)、書の読みは「澤は粵楸にあまねし」、意味は「教育の効果はあまねく幼な子(新苗)に及んでいる」という意であろう。雄渾の筆である。書道の大家で、代表作に「藏齋居士臨觀海帖」があるという。

一九〇五年十二月十二日

○徐培元—湖北游歴官断水縣知縣

○李潛之—山西奏巡游歴官

山西巡撫張曾敫によつて派遣された工芸局調査員、東遊日記である「東隅瑣記」(清末刊、実藤文庫所蔵)の

「記愛珠幼稚園」は

「日本教育之普、無礼不周、其幼稚園、尤為努本探源之法、規則之完全、以大阪愛珠其為最、園設東区今橋三丁目、特往參觀」に始まり、參觀者名簿に署名したこと、標本室を見学したこと、吳汝綸、張謇の書を見たと、遊戯室での保育の状況、教科のことをのべ、

創設の初め、西洋に模倣したので、西教にかぶれるのではないかと疑われ、志募者も少なかったが、神殿を建て、礼拝を行ったので、群疑とけたとのこと、今は所謂、体育、知育、徳育かねそなえていると記し、幼稚園経営の点にもふれ、最後にこう結んでいる。

「今大阪工商繁盛、為日本全国之冠、当以此園為造就国民之基礎也、回憶華人、当幼稚時代、為父母者、每因家務繁多、無暇訓教、甚至惑於舐犢、偏心溺愛、使幼兒在家、諸多惡戲、終日穢汚鄙瑣、飽食習慣、以致身體脆弱、心性不良、遺誤終身者不少、有子孫者、亟当集資開園、聚羣兒、請保姆代為教導、用補家庭教育之缺陷、就良知良能、涵養啓發之、十年教訓、未始不突過日人也。」

一九〇七年四月四日

○凌紀勛—女學調査員

○朱庚全—上海縣人、現禹大阪川口

一九〇九年十一月十二日

○林兆翰—天津勸學所總董

天津人、天津に新式小学校を創設したことで知られる、

私立・公立小学校の設立に参与したのは十数校を下らずという。来園時、四十七才。(一八六二〜一九三三)

○嚴智崇—天津嚴氏女学堂総理

嚴修の長男、前述の通り、一九〇二年九月二日に、父嚴修とともに来園している。幼稚園へは二度目の来園である。

○嚴智惺—天津私立第一中学校教員

嚴修の姪、後述の南開学校で教員もした。(一八八三〜一九一三)

一九一二年九月十一日

○嚴修—天津文昌宮西

来日は三度目、来園は二度目である。

○華嚴淑淋—天津保姆講習所附女子小学幼稚園監学

○嚴智鐘—東京赤坂区青山南町三一五五

嚴修の四男、東京大学医学部卒業。後、北京医学専門学校教授、国民政府民政部陸軍医学学校校長を歴任。当時二十三才(一八八九〜一九七四)。

なお、『保育日誌』同日の項に「支那天津保姆養生所附属幼稚園監学華嚴淑淋氏一族の參觀あり」と記している。

以上あげた来園者のうち何人かの要人は当時『大阪朝日新聞』の論説委員であった内藤湖南と面談している。内藤湖南虎次郎は一九〇七年、京都大学教授に就任した。(一八六六〜一九三四)

愛珠幼稚園来園者、參觀記等を紹介してきたが、その參觀者が一様に関心を示す点は、幼稚園の経営の問題であった。愛珠幼稚園が最初民間の資金によって創立されたように、清国においても、幼稚園建設は、民立から始めて公立へと拡大できないかという点であった。同時にもう一点は、幼稚園の保姆、教員を養成するための女子師範学校、或いは女子教育全般への関心である。呉汝綸は、「幼稚園の先生が女学校の卒業生であるので頗る教育に通じている」とのべ、また、大阪府立清水谷高等女学校を參觀した際、女子学生に、なぎなたをもつて体育の授業をするのを不可となし、標本を示し、鉱物学を教えて何の利益があるかと否定的な感想をのべたが、一方で、日本で「女子教育が盛んなこと、女子の知育、体育に意を注ぎたるは、日本が開明に赴きし、最大の原因なり」と感想をのべた。張養は大阪女子師範学校を訪れた際、寄宿舎、付属幼稚園にも行き、

視察は細部にわたり、経営管理はもとより、建物、教室にも及び、机、腰掛けの如きも一々寸法を測り、教育に關し熱心周到なるに人々感嘆したとある。愛珠幼稚園に園児の指導がテキパキした保姆がいた、名を聞けば、間中夕子、年十八才といったと、とくに個有名詞まで「日記」に記しているが、張書はその保姆などを想定してのことであろうか「帰国の上は自分の経営する師範学校の付属に是非幼稚園を創設したい。中国に来てくれる保姆があれば、自分の邸宅を提供して優遇するからと、その人選を、朝日新聞社の西村天囚主筆を介して、大村女子師範学校長に託した。」(同紙明治三十六年六月四日)

二、大阪府立北野中学校

—張伯苓・清水安三を中心に—

大阪府立北野中学校の起源は、一八七三年(明治六年)創立の欧学校にさかのぼる。その後、校舎も移転し、校名も、大阪府立大阪中学校…大阪府第一中学校…大阪府立堂島中学校と十ばかり変遷した。一九〇二年(明治三十五年)四月、大阪府立北野中学校と改称し、校舎も北区北野芝田

町に新築し(図版⑦)、六月一日、新校舎落成式が挙行された。校舎はその後、新淀川の北側に移り、名称は、戦後、学制改革で大阪府立北野高等学校となったが、百三十有余年、いわゆる府立一中を引継ぎ、今日に至っている。

北野中学校を訪問した清国人は、まず、中島裁之に引率されてきた、東文学堂生徒十名がいる。大阪府第一中学校、明治三十四年『日誌』七月十一日に

「本日午前九時二



⑦ 新築当時の北野芝田町校舎

十五分、北京在校中島裁之字成章、北京学校生徒拾名ヲ引率シ、本校授業參觀ノ為メ来校 全五十分退出」とある。中島裁之は、前述のように、北京に東文学堂を設立した直後に、在校生徒をともなつて來觀した。

次には、梁直臣、張寿春（張伯苓）がいる。大阪府立北野中学校、明治三十六年「日誌」五月二十二日の項に

「大阪市立高等商業学校清語、数学教員梁直臣（清国人）及張寿春来校シ授業ヲ參觀ス」とある。

また、大阪府立北野中学校校友会「六稜」第二十三号（明治三十六年八月）には、「五月二十二日、大阪高等商業学校清国語教師梁直臣及清国學生張寿春ノ兩氏來觀ス」とある。ここでは張寿春の上に「清国學生」と四文字が書き加えられている。張伯苓は当時二十六才。

梁直臣は、高商（のちの大阪商科大学、大阪市立大学）の清国人教員。前掲の『大阪商科大学六十年史』の「旧職員一覧表」に「教授囑託 梁直臣 明三五—明三七」とある。前述のように呉汝綸一行來阪時の歓迎会の席に列している。教育立国、中学校設立に強い関心をもっている張寿春の通訳となつて案内して來校したものと思われる。張伯苓は、前述のように、その翌日の五月二十三日、華学涑ら

とともに愛珠幼稚園を參觀しているが、北野中学參觀は、華学涑らとは別行動をとつた。

以下、張伯苓・清水安三を中心にして、その周辺のことを記す。

張伯苓は、天津の人。北洋水師学堂を首席で卒業し、濟遠艦で勤務。日清戦争後の一八九八年、賠償金完済まで保障占領していた威海衛から、日本軍が撤退すると、その翌日英国が代つて租借した。二日間のうちに、掲げられる国旗が、日本↓清国↓英国と三たび換わる現実をみて、人材の教育こそ救国の道と思ひ、海軍の職務をすて、教育事業に挺身することを決心したという。同年、先述の敝修の家塾に招かれ教員となる。一九〇三年來日、翌四年も敝修とともに來日、帰国後南開中学を開校する。米國コロンビア大学に行き、さらに南開大学をつくり学長になる。四八年、國民政府考試院院長（一八七六—一九五一）。

張伯苓に関しては、まず、桜美林大学学長であつた清水安三氏が記す二編の記録を紹介する。二編の内容はほぼ同じ、重複する部分が多いが、長さをいとわず引用する。初めの一編は、清水安三「北野と南開」（時事通信社「内外教育」第二三五七号、一九七二年五月九日）

「◇私は約三十年にわたり、北京朝陽門外で崇貞学園を経営、もっぱら中国人子女の教育に当たった。崇貞学園の董事長（理事長）には、日シ事変前は天津南開大学総長の張伯苓先生を、日シ事変中は北京大学総長錢稻孫先生を推薦していた。張伯苓（ちゃん・ぼうりん）先生は、その人格、識見、信仰、さらに先生を取り巻く時代環境からいって、まさに中国の新島襄、偉大な教育者であった。◇張先生は元海軍軍人。こんなエピソードを話されたことがある。軍艦に乗って訪日し、大阪湾に停泊、一日大阪市内を見物した。たまたま道に「北野中学校開校式」の立て看板を見、中をのぞいたところ、思いがけなくも来賓席にすわらされた。その後間もなく日清戦争が始まり、中国は敗戦。張先生は深く考え、軍服を脱ぎ天津に帰るや中学校を創立し、教育にもつぱら意を注いだ。南開中学がこれである。◇北野中学の北野は大阪の地名だが、中国人の張先生には北の野蛮と読める。妙な感じだ。その記憶があったからこそ、文化は南方より来るということで南開と名付けた由である。明らかに張先生は「興国の業は教育から」と考えられたのである。私は昭和二十年に北京を引き揚げて帰国した。そのころ中国に十幾つ、または二十幾つの大学があったか

つまびらかにしないが、確かなことは、うち十六大学の総長が南開中学で張先生の教えを受けた門下生だったことである。◇話を現在に移すと、最近北京を訪れるわが国の要人たち、よく新聞写真やテレビの画像で見かける。最もよく見るのは、客の要人が周恩来首相と並んで正面向いて掛けた姿である。この周首相がやはり南開中学の出身なのだ。こうみてくると南開中学の存在は、わが明治維新の松下村塾あたりに匹敵するものといえるかもしれない。◇…」

次の一編は、清水安三「南開中学校」（『北京清譚・体験の中国』（一九七五年六月 教育出版社）

「ではついでに、ここで天津の南開中学校の縁起についてひとくさり述べることにしよう。

それは日清戦争より少し前のことであった。清国に鋼鉄の軍艦が持たれたのでそれを日本に見せびらかすためであったろう。日本へやって来て、大阪湾に停泊している間、水兵や士官達はぞろ／＼市内見学を行った。その折、海軍中尉として乗艦していた張伯苓（ちゃんぼうりん）も、二、三の部下水兵を伴うてぶらぶら町を歩き回ったのだそいな。すると路傍に「北野中学校開校式」という立看板が出ていたというのである。これをみた張中尉がこの中に入ったところが、

校長は珍客として来賓席に迎えた。通訳を伴っていないなかったので、ただじっと聞いたり見たりするに止まったが、その来賓席で腦裏にきらめいたことは、「日本ですらも中学校を建てた。中国たるもの中学校を建てずば」であった。張氏は帰国してただちに海軍を挂冠、天津に南開中学校を創立したというのである。北野と南開、これはまるで異なつた意味である。「北の野蛮」「南からの開化」、まことによい対称である。北野は大阪の地名に過ぎないのであるが、張先生はそれとは知らず北の野蛮と解されたのであった。晩年張伯苓博士は重慶に分校をお建になつて、飛行機でもつて、天津、重慶間を行つたり来たりしておられた。

太平洋戦争の勃発した頃には、全中国の各地の大学の総長中十六名は、天津の南開中学出であつた。そして、現今では周恩来首相如きが南開出である。張伯苓博士が大阪から帰つて後ずつと海軍をやめず軍艦に搭乗しておられたら、到底かくも多くの人材を中国にささげることが出来なかつたことであろう。

不肖私は、大正九年（民国九年、一九二〇年）に北京朝陽門外に崇貞学園を創立したが、創立以来張伯苓博士をば崇貞学園の董事長（理事長）に仰ぎ来たが、日支事変中、

日本軍が南開中学校のキャンパスに空から爆弾を投下し、同校の図書館を全焼せしめるや、張先生は重慶に行つてしまわれたので、以後終戦に至るまで私は北大の総長錢稻孫先生に董事長になつてもらつた。」

後篇には、前篇にない「海軍中尉」としてとか「校長が珍客として来賓席に迎えた」とか、「通訳を伴っていないかつた」とかの記述がある。

更に紹介する一篇は石川忠久（桜美林大学が創設された時、文学部中国語中国文学科の教授として着任された）『漢詩の風景——ことばとところ・「野」のニュアンス』（一九七六年、大修館書店）。清水氏の二編を基にし、「北野」↓「北の野蛮」を紹介した後に、さらに別に「：ふと見ると学校で幔幕などを張りめぐらせて式典をやっています。興味をそそられて近づいてみると、「北野中学校開校式」と書いてあります。…」と記述されている。

清水氏の二篇、一読して非常に興味をひく。「北の野蛮」「南の開化」、絶妙の対比など、面白い記述がいろいろある。しかしその中に、史実など、検討すべき点もあろうかと思ふ。以下、いくつかの点について記す。

(一) まず、清水安三氏と崇貞学園について。

清水安三氏は一八九一年六月一日、滋賀県高島郡に生まれる。膳所中学校卒業、同志社大学神学部入学。一九一七年、牧師として中国に遣わされる。一九年北京に移り、二〇年、朝陽門外に崇貞工読女学校、翌二二年崇貞学園設立。米国オベリン大学神学部に留学、二年して二六年卒業。終戦により中国より引揚げ、のち町田市に桜美林大学を設立して、学長になった。(清水安三「石ころの生涯(先生年譜)」一九七七年七月、桜美林学園)(一八九一〜一九八八)桜美林大学の校名の由来は、清水安三夫妻(美穂前夫人、郁子夫人)がともに学んだオベリン大学に由来する。オペリンは故郷のドイツ・アルザスで農民教育につくし、夫人は農婦に手芸を教え、後に米国に移住した。

(二) 崇貞学園の校名の由来等については、主として清水氏の自伝「朝陽門外」(朝日新聞社、一九三九年)によってみる。崇貞学園のあった朝陽門外の芳草地一帯は、清朝以来のスラム化のすんだ地域だった。芳草地は「香りのよい草、良い匂いの花の草の生ずる地」の意味だが、実は、芳草は蓬草の意であって、要する蓬しかはえないような荒蕪地である。しかもこの一帯には失業者があふれ、人々の生活は貧しく、女性は、十才前後で売られる小娘、質貸さ

れる租妻、売春婦、ストリートガールが多かったという。なかでも、十銭や二十銭で、貞操を売る少女に心を痛めた清水安三夫妻は、彼女らに手に職をもたせる「ハンカチ、靴下を作らせて売り、同時に彼女らに教育をする、崇貞工読女学校を設立する決心をした。建物はかつて殺人事件があったという古い「お化屋敷」を安い値段で借り、教室にあてた。崇貞の由来は、「十銭といふ安っぽい貞操を思い、高い貞操、不二の貞操といふ意味で崇貞の二字を用ひた。『崇者至高也、貞者不二也、崇貞之二字可敬歎』と、当時の碩学辜鴻銘氏はほめちぎってやまなかった。」という。さらに、当時の女教員の一人は崇慈女学校出身、一人は慕貞女学校の出身であった。北京の二つの最も古い女学校崇慈の崇、慕貞の貞を併せ有する限り、支那人子女には耳障りよく、親しみを感じしめると思ったのである、という。

(三) 次に、張伯苓が、いつ来日し、いつ北野中学校に來校したのかの点である。二篇では「來校後すぐ日清戦争が始まり、敗戦」とか「日清戦争の少し前」とか、当時「海軍中尉」であったとか記されている。が、張は前述のように一八八九年十四才で北洋水師学堂入学、九四年卒業したの

が十九才の時、この年に日清戦争が始まり、北洋艦隊は全滅、やむなく故郷に帰ったという。九八年、威海衛で、祖国の実体を見て、軍職をすて教育に従事する決心をしたという。ならばこの「日清戦争前」は明らかに「日露戦争前」の間違いである。現実、軍職に身をおいた張がアジア近代史における二つの大きな戦争を間違えるのも不思議だし、また「日清戦争の少し前」、水師学堂を卒業する前に、「海軍中尉」も奇妙である。

(四) 次に、張伯苓がいつ「北野中学校開校式」に臨席したかの点である。

「北野百年史」、北野中学校「日誌」、校友会「六稜（北野中学校日乗）」等によると関係年表は以下の通りである。

●一九〇二年四月一日、堂島中学校が北野中学校と改称。

●一九〇二年五月十六日、北野芝田町へ移転。

●一九〇二年六月一日、「新校舍落成式」挙行

「式次第は校長挨拶、君が代、勅語奉読…工事報告、高崎知事祝辞…落成式祝歌、大阪市教育会長小山健三来賓祝辞…と続き、講堂で、午前十時より始まり、十二時に終了、式後一時より陸上大運動会が催され、午後七時頃に解散する」とある（「北野百年史」）。当日の来賓者は「百四十名」

（「日誌」）とも、「…高崎知事、府書記長、大阪の控訴院長、警部長、典獄長、憲兵隊長、…大阪、京都、奈良の各中学校長…代議士二人…其他百七八十名臨場…とも言う（『大阪朝日新聞』六月二日）

●一九〇二年七月一日、「開校記念式」挙行。

午前八時から講堂で、「君が代唱奏、勅語奉読、校長の訓話、開校記念式の歌唱奏」の式次第で挙行された。（『六稜』第二十二号）

●一九〇三年五月二十二日、大阪高等商業学校清国語教師梁直臣と清国学生張伯苓が来校し、授業を參觀した。（『六稜』第二十三号）

●一九〇三年七月一日、「第二十回創立記念式」が講堂で挙行された。「本校ノ創立ハ実ニ明治十六年ニ在リテ本日ハ恰モ第二十回ノ式日ナリ…」と校長の式辞で始まり、記念式が挙行された。午前八時開始し、九時には終了した。（『六稜』第二十三号）

張伯苓が臨んだという「北野中学校開校式」とは以上のどれなのか、またそれはいつ挙行されたものなのか。

一九〇二年七月一日の「開校記念式」に臨席したのか、

毎年行う恒例の創立記念日で、授業はなくて校長が、生徒に対して行う訓話が中心で、一時間程度、簡素なものである。張伯苓の臨席は不明である。

ならば、六月一日の盛大な「新校舎落成式」が考えられるが、張伯苓がその式典に臨席していたかの事実も不明である。その時、梁直臣が臨席していたのではないかと想像する。梁はそのあと、前述のように呉汝綸が来阪の際の六月二十三日の歓迎会にも出席している人である。

一方、〇三年五月二十二日の梁直臣・張伯苓両人の来校の際は大阪高商の中国語教員・梁直臣が案内し、通訳の訳を果たしたと考えられる。

すると張は〇三年七月一日「創立記念式」には、臨席したのか。しかし、それも梁直臣と二人で来校した直後のこと、改めて単独で「通訳なしで」臨席したとも考えられない。

結局、毎年行う創立記念式、校名も校舎も校址も新たに創設された学校の開校式、新校舎落成式、さらに北野中学校の校名の改稱、これらの事象が一つになって混合されて「北野中学校開校式」となったと思われる。

一九〇二年六月一日、新校舎落成式は挙行された。七月一日、恒例の創立記念式も挙行された。しかし、これとはべつに「北野中学校開校式」なるものが改めて挙行された事実はない。

結局、張伯苓が「海軍中尉として二三人の部下水兵を伴って」大阪の町に出て、「北野中学校開校式の立看板をみて」「通訳なしで」「珍客として来賓席に迎えられた」という事実関係は確認できない。

張伯苓は、そもそも一九〇二年には来日・来阪・来校はしていないと思う。当時、軍職も退いていた筈である。

張伯苓が確かに北野中学校に来校、授業を参観したのは〇三年五月二十二日である。特別な式典のある日ではなく、通常の授業を参観したのである。

一九〇四年にも五月から六月にかけて、嚴修に同行してまた来日した。(前掲・嚴修「(第二次)東游日記」)ただし、この際は、来阪・来校・来園はしなかった。

張伯苓が、来校したのは一九〇三年、日本にあつて見聞、知覚したことを清水氏に話されたのは一九二〇年頃と思われる。清水氏が、その話を二篇に発表したのは一九七〇年代初め、それより数十年以上以後のことである。当事者の

それぞれ言い違い、聞き違い、記憶違い、失念、忘却、他の別の事象との混同、推量、潤色、錯覚、誤解もあつたらうと思われる。

(五) 二篇に周恩來の名がみえるが、その点については甯恩承が記す次の記録を紹介するに止める。

「愛国運動每発於南開、且由張校長主持、民国八年的五四運動、民国十四年五卅抗英運動、均由南開發起及領導、周匪恩來、馬駿、就是送些運動中的知名學生。

一九三七年、日軍砲燬南開大學、因南開向為愛國抗日之發源地」

〔中国現代偉大的教育家張伯苓先生〕「張伯苓先生百年誕辰記念冊」筆者の政治的立場の相違から、周匪恩來と表記したのでらう。

(六) 次に「南開」の命名の由来についてである。

清水氏の二篇に「北野中学の北野は…北の野蠻と読める、妙な感じだ。その記憶があつたから、文化は南方より来るということ、南開と名付けた由である…」とある。南開は「北の野蠻」の対位語として意識される「南の開化」の略語なのである。南開命名に関しては、

一九三七年出版「民国名人図—張校長伯苓之簡歷」（前

掲「張伯苓先生百年誕辰記念冊」一九七五年所収）

「（光緒）三十二年（一九〇六年）天津邑紳鄭菊如以南開水開旁隙地十余畝、捐為校址、改建新校舍、次年遷入、名南開學校、由張任校長：」

とあり、また張伯苓自身「四十年南開學校之回顧」（王文田等著「張伯苓与南開」付録）で「光緒三十年（一九〇四年）苓与嚴範孫（修）先生、東渡日本、考察教育、知彼邦富強、実由教育之振興、益信欲救中国、須從教育着手。決定先行創辦中学、徐圖扩充。帰国後、即將嚴（修）館、王（奎章）館合併、併招收新生、正式成立中学。…當時校名、初稱私立中学堂、後易名敬業中学堂、施復稱私立第一中学堂、因私人設立之中学、尚有数処也。中学成立後之四年、学生人数大增、以校舍偏仄、不能容納、得邑鄭菊如先生捐城西西南南開地十畝為校址、遂籌經費、起建校舍。是年秋、乃由嚴宅遷入新校舍、校名改稱南開中学。蓋以地名也。」

と「地名に由来する」と明記されている。一九四〇年半ば頃に記されたと思われる。

またその南開の地については、天津居留民団「天津居留民団三十周年記念誌」（一九四一年五月）には、「南開大学」

の項に

「光緒年間に開かれた嚴範孫、王奎章両氏の家塾が南开大学の前身であった。…一九〇七年（明治四十年）

城南南开に校舍を新設し、南开学校として開校した。

南开の地名は元「南窪」即ち城南の野原の意味であつて、後此れを校名としたものと称はれる。」

とある。また「校址所在周囲都是污水窪地、当地人稱低窪地带「開窪」（新開闢的窪地）、在天津旧城的西南城角、故叫「南开」（胡光煦「我所知的張伯苓校長」）

要するに「南开地方 意謂天津城南開窪」であつた。

開窪、開窪は、天津地方の方言で「広くひらけた土地」をいう。そして、その南开地域はどんな状況の土地だつたのか、甯恩承の前掲論文（胡・甯二論文ともに「張伯苓先生百年誕辰記念冊」一九七五年所収）には

「一九〇八年移校到南开荒地、天津人稱為開窪、天津有南开、西開、老西開等地。南开是地名、原是最荒僻堆拉拔的地方、天津最大臭水坑就在南开学校的牆外。北方春季大風、臭氣滿樓、凡是南开老學生均飽受臭氣之薰陶、而今六十年後或尚可於想像中嗅到那大臭坑的臭味」

とある。ゴミ捨て場であり、汚水池があり、その悪臭が校舍全体にただよってくる、非常に環境のよくない土地である。

(七) 最後に、「北野と南开」について

「北の野蛮」に対する「南の開化」、見事な絶妙な対比である。反射的に「南船北馬」を思いつくぐらいである。語呂合わせ的にもうまくできた成句のようでもある。

張伯苓は自ら記すように、日本より帰国後、中学校を建て、校名は私立中学堂↓敬業中学堂↓私立第一中学堂と改称し、そして、天津の南开の地に遷つて、南开学堂と定名した。来校後、数年後のことである。一方北野中学校は、校名は欧学校↓大阪府第一中学校↓堂島中学校と改称し、北野芝田町に移転して、北野中学校と改称した。

両校とも、それぞれの地の最も古い中学校、ともに「第一中学校」と称し、最後は、それぞれの地名に由来して定名した。それが結果的には「北の野蛮」と「南の開化」の対称語の略語としての「北野と南开」となった、ということであろう。また「北野―北の野蛮」の意識も清国人にとつてはあり得ることだが、その意識も北野中学校に来校して始めて意識されるものでもない。

張伯苓が、同じように、悪い条件・環境の中で、崇貞学園をつくり、経営に苦勞・尽力している清水氏に対して

「文化は南方より来るといふことで南開と名付けた」と話したなかに「北野―北の野蠻」に対する対比語・反対語として意識したのである。いや、或いは文化の点で凌駕する意もあつたかも知れない。それは、「文化は南から」の意識からさらにすすんで、「文化の発信地としての南開」を目標に、それを見すえての命名だったかと思う。「城の南のひろく開けた土地に、文化の花開く、南開学堂をつくる」意であつたと思う。

そしてこの話は、張伯苓が崇貞学園の理事長に就任した一九二〇年、崇貞学園の校名の由来が話題になつた時に、張伯苓が、十七年以前の一九〇三年、北野中学校を参観した頃にいただいた記憶をたどり、回想して、清水氏に話されたものと想像する。

そして、それからさらに五十年程の後の一九七〇年代の初めに、清水氏がこの話を二編に文章化された。

おわりに

当時の大阪について、参観者の一人李濬之が「今、大阪は商工業が繁栄し、日本全国に冠たる」と記し、呉汝綸の歓迎会の席上で、中橋徳五郎大阪商船会社社長が、「清国と我邦とは商業上至大の關係あり、就中、大阪は、其取引の約八分を占める土地」というのに対し、呉汝綸は「大阪の繁栄は、一つは港灣を抱えたること、一つは日本の中央の好位置を占めたるに由る」といい、製産物の集散に便利な、貿易の中心地として、依然商工業に重要な地位を占める地と意識している。『(大阪毎日新聞)』明治三十五年六月二十五日)

大阪は近世以来「天下の台所」と称せられた所、それが当時も依然として継承され、さらに商工業の發達した繁栄した所と觀察されている。或いはアジア貿易の中心であり、日中交流の窓口でもあつた所と意識されている。

その大阪は、江戸時代より、また日本の学問の中心でもあつた。その明治時代の大阪で、一番古い愛珠幼稚園、一番古い北野中学校の参観とそれにまつわる清国人・日本人の記録等を紹介した。明治末年、清朝末期の日中文化交流

の一面の紹介になろうかと思う。

当時来日視察団は、教育界のみならず、政界、商工業界のあらゆる施設を見学・調査し、視察地も大阪のみならず、東京を中心に北海道まで全国に及んでいる。教育界の視察でも、幼稚園が重点施設ではない。視察は幼稚園から小学校、中等学校、女学校、高等学校、大学、種々の専門学校に及んでいる。この際の知見に基づき、どのような報告、建築がなされ、それらがどう実現されたか、すでに若干の成果もあるが、他にまちたい。

本稿の作成について、奈良大学・森田憲司教授、南開大学・武安隆教授から、ご教示を多く贈った。感謝申し上げます。次第である。

参考文献

- 汪婉『清末中国対日教育視察の研究』（吸古書院 一九九八年十二月）
- 嚴修関係・武安隆点注『東游日記』（天津人民出版社、一九九五年十二月）
- 清水安三関係・自伝『朝陽門外』（朝日新聞社、一九三九年）、山崎朋子『朝陽門外の虹』（岩波書店、二〇〇三年七月）
- 張伯苓関係・南開校友会『張伯苓先生百年誕辰記念冊』（一九

七五年）王文田等著『張伯苓与南開』（伝記文学叢書二六、一九六八年）をはじめ、その他多数である。崇貞学園の理事長就任、反日運動である五四運動の主動、日本軍による南開大学爆撃、北京大学・清華大学等西南連合大学創立により理事長辞任、錢稻孫（北京大学総長―『万葉集』『源氏物語』の翻訳者）の就任・辞任の後をうけての理事長再任、等々の対応を含め、全体像はどのようであったのだろうか。なお清水氏は、自伝前掲書では、張伯苓のことは一切言及していない。また張伯苓も清水氏には言及していない。また張氏は前掲「四十年南開学校之回顧」の中でも、一九〇二年の動向、〇三年の来日、来阪、来園、来校參觀のことは一切記していない。また趙光宸「張伯苓先生年譜」（『張伯苓先生記念集』所収・近代中国史料叢刊統編、十八輯）では、一九〇一年、〇二年、〇三年の条は完全に空白、字も記されていない。